OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	長門方言の文末詞ホとソについての一考察
Author(s)	中田, 一志
Citation	日本語・日本文化. 2024, 51, p. 207-237
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95220
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究ノート〉

長門方言の文末詞ホとソについての一考察

中田　一志

はじめに

生きた日本各地の言葉を集めた『日本のことばシリーズ』というシリーズがあるが、その中の『山口県のことば　日本のことばシリーズ 35』（以下、『山口県のことば』）では周防方言、長門方言、萩方言の形式名詞について次のような記述がされている。

周防方言の「形式名詞の「の」には、主に〜ホが使用され」、長門方言の「形式名詞「の」は、周防方言と同じく〜ホが使用される」。そして、両方言の例として次の共通の例が挙げられている。

【周防方言・長門方言】

例：オーキーホガ　ホシー（大きなやつが欲しい）

ワタシノホジャ（私のだ）

イクホジャ（行くのだ）

そして周防もこの形式は「いずれも東部ではあまり聞かれない」という。そして、「西部の宇部では、ワタシノソジャ（私のだ）　イクソジャ（行くのだ）のように、〜ソが使われることもある。ホ，ソは文末助詞として使われることも多い」として次の例が挙げられている。

例：イクホ（行くよ）。

萩方言では「形式名詞「の」は、周防方言・長門方言と異なり、〜ソが用いられる」とし、次の例が挙げられている。「ただし、イクソイノ（行くのだ）の「ソ」は東部ではあまり見られない」という。

例：オーケナソガ　ホシー（大きなやつが欲しい）
　　オレノソジャ（私のだ）
　　イクソイノ（行くのだ）

すなわち概略山口県の形式名詞は次の表で表される。

山口県の形式名詞

	周防方言	長門方言	萩方言
一般的	ホ	ホ	ソ
局所的	東部：ホ少ない 宇部：ソも	N/A	N/A

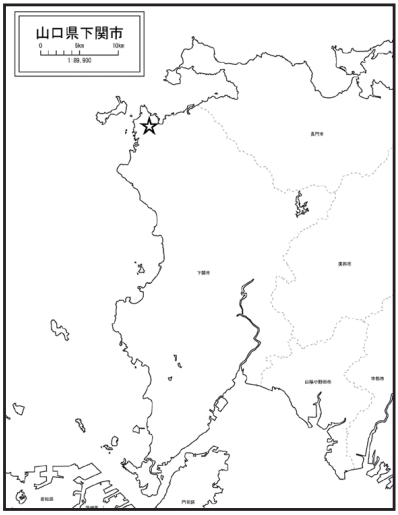
現在の宇部市は、「大部分が「長門国」に該当するが、一部「周防国」だった地域（東岐波・西岐波など）がある」[1] ことから、形式名詞あるいは文末詞でホとソの使用が可能であると考えられ、大変興味深く筆者を惹きつけるのであるが、本稿ではひとまず方言談話データが整っている山口県豊浦郡豊北町の方言談話を使用して分析を試みることにする。

この地方の方言談話は『全国方言談話データベース「日本のふるさとことば集成」第 15 巻　広島・山口』として国立国語研究所によって編集され、現在同研究所によって『日本語諸方言コーパス』(Corpus of Japanese Dialects：COJADS) として公開されている。また、この地方は旧長門国に属することから長門方言が優勢だと考えられ、形式名詞、文末詞においてホの使用が予測されるのであるが、実際はソの使用も認められるという宇部方言における使用状況と似ている点も興味深い。

本稿では特に文末のホ・ソを観察する。この形式に繋辞（共通語の「だ」相当）や終助詞がつくことによってその機能に影響があると予測されるが、それには立ち入らずに議論を進めることにする。

方言談話データとホ・ソの使用状況

『日本のふるさとことば集成　第 15 巻　広島・山口』（以下、『日本のふるさとことば』）に収録されている方言談話の属性は次の通りである。



収録地点：山口県豊浦郡豊北町阿川
収録日時：1978 年（昭和 53）年 8 月 3 日
話題：「井戸掘り，箱苗，農業の今昔」
収録時間（CD）：37 分 09 秒

この地域は、現在の下関市に属し、地図の星印の位置に当たり[2]、旧長門国に属する。また、話者は 3 名で次の通りである。

A：男性 明治 44 年生（収録時 67 歳）
B：女性 明治 29 年生（収録時 82 歳）
C：男性 明治 44 年生（収録時 67 歳）

文末詞として用いられたホとソの使用回数は次の表の通りである。この表から分かるようにこの地域では（談話への参加が少ない C を除くと）ホ・ソのいずれもが使用されている。話者は長門方言話者と考えられるが、『山口県のことば』の記述とは違い、文末詞ホだけでなく、ソの使用も相当数見られる。

井戸掘り

	A	B	C
ソ	12	2	N/A
ホ	6	4	N/A

箱苗

	A	B	C
ソ	12	1	N/A
ホ	1	0	N/A

農業の今昔

	A	B	C
ソ	5	1	1
ホ	4	2	0

また、今回は中心的には分析しないが、補文化辞にソが使われていることも興味深い。[3]

以下、『日本のふるさとことば』の三つの話題に現れる文末詞ホ・ソを分析していく。談話の中でのそれぞれの機能を観察するためには、複雑な雑談の話の流れや参加者のやり取りを把握する必要がある。したがって、話の流れを追いながらそれぞれの機能を議論していく。それにより記述が重複するところもあるが了承願いたい。

談話「井戸掘り」

最初は「井戸掘り」で、B が敷地内に井戸を掘ったという話である。三つの談話の中で最も長く、便宜的に 9 つの小談話に分ける。

小談話 1 は次のように要約できる。文末詞ホ・ソが使われた箇所には下線を施し、文末詞ホが現れた箇所には太字で、文末詞ソが現れた箇所には細字で表記してある。談話データは COJADS のものであるが、一部読みやすく表記を換えたところもある。要約と談話データには照合しやすいように右肩に上付文字で発話者を表すアルファベット（A, B, C）、百位に小談話番号、以下通し番号を付してある。

小談話 1

Bの長男（X1）が見てもらいたいものがあると言うので，AはB宅に行った[A101]という。Bは井戸は炊事場の近くがいいと思っているが，長男はそこから遠い敷地の上手の方がいいと言っている。X1はAにどちらがいいか尋ねるが，Aはどちらも出ると**答えた**[A102]と。結局はX1の希望の遠い方になった。（このエピソードがきっかけとなって）昔は井戸は水が落差を考慮して井戸の位置を決めていた[A103]が，最近は機械の発達のおかげで，低地からでも水を上げられるので，水がでるところを掘らなければいけないんだ[A104]とAは言う。

26 の文末詞ソ [A101] は「X1 が A にみてもらいたいものがあると言った。それで A は B 宅に行った。X1 が A に尋ねた。そして A が答えた。……」という一連の出来事の中での場面の説明のような機能を持っている。この文末詞ソを「場面説明のソ」と呼ぶことにする。

26	A	オウチニ　イカンニャー　イケン。　イコーエーテ。　デ　イッタソ[A101] イナ。	お宅に　行かないと　だめだ。行こうよと。　それで　行ったんだよね。
27	B	ハー　ハー。	はあ　はあ。
28	A	ヘテ　アンタガター　アノー	そしたら　あなたがたは　あの
29	A	スイジバノ。	炊事場の。
30	B	ソー　ソー。	そう　そう。

31	A	チカクガ エーッテ ユーテ。ヘカラ X1 チャンワ アスコノ カミノ ホーガ エーッテユー。	近くが いいと 言って。それから X1 ちゃんは あそこの上手の ほうが いいと 言う。

次の文末詞ホ[A102]が現れる 37 は、26 のような場面説明ではない。ここで特徴的なのは、38 で相手の笑いを誘っていること、もう一つは 39 で「井戸水が出る」ということを話者が繰り返しているところである。

34	A	ドッチガ ミズガ デヨーカイナーッテ	どっちが 水が 出るだろうかなと
35	A	ユーカラ。	言うから。
36	B	ハー。	はあ。
37	A	ドッチモ デルッテ ワシガー<u>ユータホ</u>[A102]。	どっちも 出ると 俺が <u>言ったの</u>。
38	B	{笑}。	{笑}。
39	A	ドッチ ホッテモ デルッテ。	どっちを 掘っても 出ると。
40	A	マ オレモ カミサマジャナーカラ ワカランケドノー。ドッチ ホッテモ デルイ コリャーッテ。	まあ 俺も 神様では ないから わからないけどね。 どっちを 掘っても 出るよ これはと。

このような文末詞ホを「注目引き（attention grabber）のホ」と呼ぶことにする。

64 で A は最近の機械の発達による事情の変化を語るのであるが、それと参照的な昔の事情 62 で補足的に説明されている。そこに文末詞ソ[A103]が現れている。

62	A	コンニャー ドーモ グアイガワルイ。ミズワ ラクサデ コンニャー ドーモ グアイガワルイ チュー イツモ カンネンデ <u>オッタソ</u>[A103] <u>イナ</u>。	水が流れて来ないと どうも ぐあいが 悪い。水は 落差で 来ないと どうも ぐあいが 悪い という いつも 考えで <u>いたんだよね</u>。
63	B	ウーン。	うん。
64	A	ガ サイキンー アー シテマー キカェエガ ハッタツシタカラナ。	だが 最近 ああ して まあ機械が 発達 したからね。

このような文末詞ソを「補足説明のソ」と呼ぶことにする。この特徴として、64 のように「ガ（だが）」のような逆接の接続詞が用いられる。

68-70 で機械が発達してもどこでも掘ればいいのではなく、井戸水が出るところ、つまり水脈のあるところを掘らなければならないと A が言うくだりは解説的な説明である。この文末詞ソ[A104]は解説的な「補足説明のソ」である。

68	A	ドコデモ　カシコデモ　ミズノデル　トコロオ　ホランニャーナー。	どこでも　かしこでも　水の出る　ところを　掘らないとね。
69	B	ウーン。	うん。
70	A	イケンソ[A104]ェエ。	いけないんだよ。
71	B	ナー。	なあ。
72	A	ホェデ　ナンジャローガナー。マー　ソー　ソー　シテカラ	それで　なんだろうがな。　まあ　そう　そう　して
73	A	マー　アソコエ　チーットハー	まあ　あそこへ　ちょっと　もう
74	A	ブルデ　ホリカケチョル　チュオーガナ。	ブルドーザーで　掘りかけている　と言うんだよね。

小談話 2

その時はすでにX1がブルドーザーで掘り始めていたとAが言う。3〜4間ほど掘り進めていた[B101]とBが付け加える。その後，井戸を掘った後どうするのか，岩を埋めて濾過するのかという問題について，またBの長男がAのところに相談に来た。Aは濾過に使うシュロの皮を自分の息子に木に登って，その皮を剥がせようと言っていた[A105]のだが，剥ぐのもめんどうなので，根元から倒して，家に持って帰って，女衆にでも剥いでもらえばいいということになった。それで，とにかく掘るだけ掘ってみろと言った。それでB氏の孫（X2）がとうとう水脈を**掘り当てた**[A106]と。

79 は 74 の描写をさらに詳細に説明したものであり、文末詞ソ[B101]は具体的な「補足説明のソ」の類いであると考えられる。

74	A	ブルデ　ホリカケチョル　チュオーガナ。	ブルドーザーで　掘りかけている　と言うんだよね。
（中略）			
79	B	サンゲン　ヨンゲングライホッ　ホッタソ[B101]エナ。　ブルガ　ホッタソ[B101]エナ。	三間　四間ぐらい　（ホッ）掘ったんだよね。　ブルドーザーが　掘ったんだよね。

80	A	ソレカラ コンドー イドー ホッテモ コンド アト ドネー シタラ エーカ。イワオ トメテ	それから 今度 井戸を 掘っても 今度 後 どのようにしたら いいか。岩を 埋めて

79 で「ホッタソエナ」が繰り返されているが、繰り返しによって相手の注目を引こうとしている 37-39 とは異なる。74 で A は既に X1 が掘ったことを述べているからである。

A は続けて、シュロの木を引き倒すことにしたことの参照的な事情として 90-92 を語るところで、文末詞ソ[A105] が使われている。すなわちこれは「補足説明のソ」である。

90	A	ウチノ ムスコエナ。ウチノムスカー ミガ カルイカラ。オマエ ノボッテカラ ヘージャゲーッテ。	うちの 息子へね。うちの 息子は 身が 軽いから。おまえ 登って はいであげろと。
91	B	マー。	まあ。
92	A	イーヨッタソ[A105] エナ。	言っていたんだよ。
93	B	ホー。	ほう。
94	A	トコロガ ヘグソワ メンドークサーカラナ。	ところが はぐのは めんどうくさいからね。
95	B	ンー。	うん。
96	A	イッソ ハー ネモトカラ ヒキタオセーテ。{笑}。	いっそのこと もう 根元から引き倒せと。{笑}。

そして、A は 110 でついに X2 が水脈を掘り当てたことを語る。

108	A	ヘテー マー アンタガ シッチョッテノ ヨーニ	そして まあ あなたが 知っていらっしゃる ように
109	A	X2 チャンガ	X2 ちゃんが
110	A	**ホリアゲタホ[A106] イナー**。	**掘りあげたんだよね**。
111	B	ウン。	うん。
112	A	ウーン。	うん。

108 から分かるように B が認識していることを A は前提としている。したがって文末詞ホ[A106] は「注目引きのホ」ではない。111 の B の相づち、112 のそれに

合わせるように自ら打つ相づちが後続することから考えると、A はこの出来事に対する「感心・感動」を表明していると考えられる。このような文末詞ホを「情意表明のホ」と呼ぶことにする。

小談話 3

Bは，炊事場から遠い場所なら夏は水が暑くなり，冬は水が冷たくなるから炊事場に近いところに井戸を掘ってほしかったけど，井戸水が出るならしかたないと思ったという。Aは，井戸水は夏は冷たく，冬は暖かいくなるものだ[A107]，だから大丈夫だと言う。

結局、井戸は炊事場から遠いところになったのだが、A は B が 124 のような誤った認識を持っているのを 126 で改めようとする。

123	B	ホンナラ ハー ホンナラ シヨーガナー。	それなら もう それなら しかたがない。
124	B	ナツァー アノー ヌクイ ミズ。 ヒヤーン フユワ ヒヤーミズッテ。	夏は あの 温かい 水。（ヒヤーン） 冬は 冷たい 水ということで。
125	B	トーローッテ ユー マーハー ケッシン シタカラナ。	通ろうと いう まあ はあ 決心を したからね。
126	A	ナツワ アノー ヌ ヒヤイミズ。 フユワ ヌクイ ミズーナルソ[A107] イ。	夏は （あの）（ヌ） 冷たい 水。 冬は 温かい 水に なるんだよ。
127	A	ウーン。	うん。

127 で A は先行する自らの発話に対して相づちを打つが、112 の相づちとは異なり、「感心・感動」などの情意をあらわしているわけではない。相手の認識を改めるため解説的な態度をとっていると考えられる。すなわちソ[A107]は「補足説明のソ」である。

小談話 4

また，X1 が見に来てくれというから A は**行ってみた**[A108]。そしたら，B の孫（X2）が一生懸命掘っていた。A が穴の中の様子を見に行くと，すでに土の層が出て水が出て，これ以上掘っても無駄であることを伝えた[A109]という。そして B は底はどんな**状態だったか**[B102]，**土だったか**[B103]，岩だったかと A に尋ねる。A は焼けたような層が**出ていて**[A110]，水が噴き出ていた，この層が一番**いい**[A111]と答える。その層は素人が掘っても崩れるような泥ではない，いくら掘っても大丈夫だ[A112]と言う。B は（孫が）あれは本当に**掘ったんだ**[B104]と言う。（その後，井戸の内側の囲いと井戸水の量，生活に必要な水量の話が続く。）

147-149-151 で X1 に呼ばれて A が行ったということは 26 での出来事の再発である。そこでは「場面説明の文末詞ソ」が使われたが、ここでは文末詞ホ[A108]が使われている。153 で接続詞「ヘター（そうしたら）」が使われ、確かに場面設定がされていることから考えると、他に文末詞ホを積極的に用いる何らかの要因があるはずである。

147	A	マタ　X1 チャンガ　ウチニナー。	また　X1 ちゃんが　家にな。
148	B	ハー　ハー。	はあ　はあ。
149	A	チョット　キテ　ミテ　クレチュー。	ちょっと　来て　みて　くれと言う。
150	B	フーン。	ふうん。
151	A	ホレカラー　ワシャー　イッテ**ミタホ**[A108]。	それから　俺は　行って　**みたんだ**。
152	B	フン。	ふん。
153	A	ヘター　サカンニー　X2 チャンガ　ホリヨッタナ。	そうしたら　さかんに　X2 ちゃんが　掘っていたね。
154	B	ハー　ハー。	はあ　はあ。

後続を見れば分かることだが、ここは X2 が水脈を掘り当てたという成功談を導く場面設定でもある。そう考えると、単なる場面説明ではなく、A の「驚き・発見」を表す情意を伴っていると考えるのが自然であり、「情意表明のホ」と考えるのが妥当であろう。また、小談話 4 に文末詞ホが多く現れているということは、一般的に成功談には情意表明が多いということと関連があると思われる。

163-165 は A が穴の中の様子を見に行くと、土の層から水が出ているのを発見し、これ以上掘っても無駄であることを伝えたというくだりである。続けて A は何らかの話を続けるつもりだったと思われるが、167 で B によって遮られたと考えられる。したがって、文末詞ソ[A109]は「補足説明のソ」であると思われる。

163	A	エー ヤキガ デテナー。 ミズガ デョーガナ。 ドンドン ドンドン。	いい 土の層が 出てね。 水が出ているんだよ。 どんどん どんどん。
164	B	ホー。	ほう。
165	A	マー コレカラ ウヤー ナンボ ホッタッテノ。 イガワガヨケー イルダケ ソンデヤッテ ユーソ[A109]。	まあ これから 上は いくら掘ったってね。 井戸の内側の囲いが たくさん いるだけ 損だよと 言ったんだ。
166	A	ジューブン ミズガ アルカラヤメーッテ ユーテ。	十分 水が あるから やめろと 言って。
167	B	アノー ソコワ ドネー ナッチョッタホ[B102]カナー。 アンギダギダ スルー。	あの 底は どのように なっていたのかな。 あの ぎとぎとする。
168	A	イヤ アノー。	いや （あの）。
169	B	アノ ツチジャッタホ[B103]。	あの 土だったの。
170	B	イワジャッタカナ。	岩だったかな。
171	A	チョット イヤ イワジャナー。 ヤケタナー。	（ちょっと） いや 岩ではない。 焼けたような。
172	B	ンー。	うん。
173	A	ソーガ コー デチョッタホ[A110]。	層が こう 出ていたんだ。
174	B	ホー。	ほう。

167 で B が A を遮ったのは穴の底の状態を知りたいという情意による衝動からであろう。したがって文末詞ホ[B102]は「興味・感心」を表す「情意表明のホ」である。続く 169 の文末詞ホ[B103]も同様である。これに答える 171-172 では A は文末詞ホ[A110]で「発見・驚き」を表明し、「情意表明のホ」を用いている。

続けて A は 178 で一般的な解説をしている。文末詞ソ[A111]は解説的な「補足説明のソ」である。

175	A	ソレカラ プップップ デルイ。 ミズガー。	そこから ピュッピュピュッピュ 出るんだよ。 水が。
176	B	ホー。	ほう。
177	A	ウーン。	うん。
178	A	アノ ソーガ デタラ モットモ エーソ[A111] エナ。	あの 層が でたら いちばんいいんだよね。
179	B	アー。 ソレカナー。	ああ。そうなの。

さらに A は 186 で文末詞ソ [A112] を用いるが、それは解説的な「補足説明のソ」である。それを聞きながら突如その時の記憶が蘇ったのか、B は 185-187 で X2 の成功に感心を表明する。この文末詞ホ [B104] は「興味・感心」を示す「情意表明のホ」であろう。

185	B	マー アレワ マー ユーガヨー ホッタ コトイナ。	（まあ） あれは （まあ） 言うが よく 掘った ものよね。
186	A	ナンボー ホッテモ エーソ[A112] クヤー セン。	いくら 掘っても いいんだ。崩れは しない。
187	B	ホント ヒトリデ **ホッタホ[B104] ゾナ**。 アレオ。	ほんとうに ひとりで **掘ったのよね**。 あれを。
188	A	ウン。 クヤー センイナ。	うん。 崩れは しないよね。

小談話 5

（井戸ができて良かったこととして）今夏の干ばつのときの話題に移り，B は買ってきた長いホースを田まで**通し** [B105]（それで，干ばつを凌いだことや），B に曽孫が生まれるのにオムツを洗う場所がないと言っていた [B106]（のが解決されたことを話す）。

小談話 5 は掘り当てた井戸の恩恵を B が語る場面だと考えられる。恩恵の一つは 246-248-250-252 にあるように干ばつでヒビが入った田に井戸水が引けたことである。252 で文末詞ホが使われている。

246	B	ダェエオンノ タエ モッテイッテナ。	大音の 田へ 持って いってね。
247	A	オー。	（おう）。

248	B	アノー ン マ ミトエ モ アノ コノ イデー モッテ イッテナ。	（あの）（うん）（まあ） 田の排水口へ （モ）（あの） この田の用水のために川の水をせき止めた所へ 持って いってね。
249	A	ウン。	うん。
250	B	アノ ナガー ホースデカラ ミチノ シタノ。	（あの） 長い ホースで 道の下の。
251	A	オ オ。	（オ）（オ）。
252	B	ヒワレチョル ソエ ドンドン ドンドン **アタシタホ**[B105]。	ひびが入っている ところへ（ドンドンドンドン） **渡したの**。
253	A	オー。 ソレカナ。	おう。 そうかな。
254	B	ハー。 マー コリャー ホントニ。	（はあ）。（まあ） これは ほんとうに。

254 の「ホントニ」にあるように「感心・感動」を伴うことから、この文末詞ホ[B105] は「情意表明のホ」であると考えられる。

さらに B はもう一つの恩恵を語ろうとしていたと思われるが、それは A に 269 で遮られたような形になっている。おそらく前提として 266-268 のようなエピソードがあり、井戸ができたおかげで解決したといったことを言わんとしていたのだろう。そう考えると文末詞ソ[B106] は前提を表すような参照的な「補足説明のソ」であると考えられる。

266	B	マー ホンード アノ マゴガ ヒーマー。 ワタシノ タメニャー ヒーマゴジャケド ヒーマゴガ ウマレルソニモー オムツノ アラウ バガ ナイワーナ。	まあ ほんとうに あの 孫が（ヒーマー）。 私にとっては ひ孫だけど ひ孫が 生まれるというのに もう おむつの 洗う 場所が ないわよね。
267	A	ワタシャー アノ。	私は （あの）。
268	B	モー ソレオ ヤカマシュー ヤカマシュー イーヨッタソ[B106] イナ。	もう それを やかましく やかましく 言っていたんだよね。
269	A	クシギノ イドデモ アレ オミーナ。 モー サンダイカラ ナンギュ シヨッタジャナ。	串木の 井戸でも あれを ご覧なさいな。 もう 三代にわたって 苦労を していたよね。

小談話 6

その後，A が掘った「串木」の井戸の話に移る。井戸の内側の囲いを作るのに時間がかかったが，今はいつも十分な水が溜まっていて，水もきれいだ，A 氏はそれを井戸堀りの最後の仕事だと言う。子供からもう無理をするなと言われるからもうしないと言う。B も同調し，井戸掘りは危ない仕事だと言った（のがきっかけとなって，A は危なかった話を披露する。）

小談話 6 では文末詞ホ・ソのいずれも使用されず、井戸掘りの危なさが A によって語られる。

小談話 7

「栄屋」の井戸を掘ったエピソードで，一、二日雨が続いた後，井戸の内側の囲いを作る時，壁が全部崩れてきた[A113] ことがあったという。

290 で井戸掘りの危なさの一例が示される。そういう意味で文末詞ソ[A113] は具体例による「補足説明のソ」である。

289	A	ヒーテー　フツカ　チョットソノ　アメガ　フッテナー。　シゴトー　セダッタエー。	一日か　二日か　ちょっと　（その）　雨が　降ってね。　仕事をしなかったよ。
290	A	ヘテ。　サー　イガワ　イレルデヨッテ　ユータ　トキニャーアンター　バタバタ　ヘリガカベ　ミナ　クエルソ[A113] ジャ。	そして。「さあ　井戸の内側の囲いを　入れるよ」と　言ったときには　（あなた）　バタバタと　縁が　壁が　みんな　崩れるんだ。
291	B	フーン。	ふうん。
292	A	ヤッパ　オソロシーイナー。	やはり　恐ろしいよね。

小談話 8

B は A が（今回の）井戸堀りに協力してくれたことに感謝し，（濾過装置を作る）技術にも大層驚いたという。しかし，A は自分が言った通りに X1 が作らず，簡単にすませてしまっている，井戸の囲いの間をきちんと繋いでないのが**気に入らない**[A114] と言う。そのやり方はダメだ[A115]、ダメなんだ[A116]，赤泥，石灰，セメントを混ぜたもので塗りこむのだ[A117]、そうでないといけないという。

A は X1 の井戸の処理の仕方に不満を持っているようである。それで 313-316-317-319 でそれを印象付けるような話し方をする。313 の文末詞ホ[A114] は「注目引きのホ」である。そして具体的に何がダメなのかを 317-319 で補足している。すなわち文末詞ソ[A115,A116] は具体的な「補足説明のソ」である。

310	A	ゴ　ゴマカーチョル。　X1 チャン　ゴマカーチョル。	（ゴ）　ごまかしている。　X1 ちゃんは　ごまかしている。
311	B	ハー　ハー。　ソリャー　アノー　ザェエリョーガナー。	はあ　はあ。　それは　あの　材料がね。
312	B	ハー。	はあ。
313	A	イドノ。　アノー　イガーノ　アイダー　ツナガラサンナ　**キニイランホ**[A114]。　ワシワー。	井戸の。　あの　井戸の内側の囲いの　間を　繋がないと　**気にいらないんだ**。　俺は。
314	B	ハー。　ソーカナー。　ハーハー。　ツイダ　ツナェエデナー。　タダー　アノ　カサネテヌッタダケ。	はあ。　そうなの。　はあ　はあ。　継いだ　繋いでね。　ただ　あの　重ねて　塗っただけ。
315	A	ハー。	はあ。
316	A	ウンー。　イケンイ	うん。　だめだよ
317	A	イケンソー[A115]。　アレジャー。	だめなんだ。　あれでは。
318	B	ハー　アレジャー　ヤッポ　イケンジャロ。	はあ　あれでは　やはり　だめだろう。
319	A	イケンソ[A116]。　アリャー　タタキツチデナ。	だめなんだ。　あれは　たたき土でね。

そして、321-322-325-326 で A が正しいやり方を解説する。したがって、文末詞ソ[A117]は解説的な「補足説明のソ」である。

321	A	アノ アノ アカドロト	あの あの 赤泥と
322	A	イシバェト セメントー マゼテナー。	石灰と セメントを 混ぜてな。
323	B	フーン	ふうん
324	B	ハー。	はあ。
325	A	コー ダンゴノ ヨーナ モノコサエテカラ アェ アェエダヤ コー ヤッチョエテナ。 ピシャート ヤッテカラ。 ウエ	こう だんごの ような ものを 作って（アェ） 間を（ヤ） こう やっておいてね。 ピタッと やってから。 上
326	A	アノー ナカモ ソトガワモミナ ヌリコムソ[A117]。 ＊＊＊	（あの） 中も 外側も みな 塗りこむんだ。 ＊＊＊

小談話 9

（そのやり方が優れている証拠として）A は X3 さんの鶏舎の外側のタンクを作った[A118]，それは全く水漏れしない（ことを持ち出す。）地面の中の井戸掘りはたやすいが，地面の上のものを作るのは難しいと言う。

続けて 327-328-330 で A は鶏舎のタンクを作った話を語り始める。その後の 331 での感心を示す反応や 332 での自慢話から文末詞ホ[A118]は「注目引きのホ」だと考えられる。

327	A	ヘーカラ X3 ノー ソコノ X3 ノ ケーシャノ アノー ソトガワノ アノ	それから X3 の そこの X3 の 鶏舎の あの 外側の あの
328	A	オーキナ タンクガ アルイ。	大きな タンクが あるよ。
329	B	ンー。	んー。
330	A	ソレモ ワシガ ツイタホイナ[A118]。	それも 俺が 築いたんだよね。
331	B	ホー。	ほう。
332	A	ヒトッツモ モリャー セン。	まったく 漏りは しない。
333	B	ハー。 ソレカナー。	はあ。 そうなの。

談話「箱苗」

次の談話は「箱苗」についてで、便宜的に 4 つの小談話に分けられる。

小談話 1 は B の質問に対して A が箱苗の土やその処理、苗代について説明する場面である。

小談話 1

箱苗の経験がない B が A に土選びについて質問する。A は鉄分を含んでいるからアカマサがいいと答える。後で土の消毒をするのだ[A201]，だから箱苗は厄介だと言う。さらに，B は一つの箱苗にはどのぐらいの土が入って，どのぐらいのモミを巻くのかと質問する。A は箱の大きさは 20cm x 30cm くらいで，モミは 2 合くらい，取水しにくい田に植える箱苗は一合八勺くらいだと答える。というのも早く植えないと黄色くなってしまう[A202]。田植えの 25 日前にモミを撒くのが理想的だと。今年は苗を蒔いてから 35 日，40 日も経った，そうすると苗が長くなるのではなく，根元が黄色くなる[A203]，それを植えても根付きが悪い。だから熱心な人は田植えの 3 日前に尿素を微量かけておくのだ[A204] と説明する。（田植えをした後のことや，水苗代の場合の話が続く。）水苗代と違って箱苗は計算通りに水が取れないと困ることになる[A205] と。A は，耕運機で土をかき混ぜると翌日に田植えをするということはできない[A206]，（土が固まってからでないと）田植え機が埋まってしまってやりにくい[A207] と言う。だから，植代は 2、3 日前にかき混ぜておかなければならない。（除草剤の話が続く。）手で田植えするのなら，前日に土をかき混ぜた方が土が柔らかくて手が痛くなくていい。しかし，田植え機で植える場合はそれができない[A208]，土が柔らかすぎるといけない。ある程度土が安定しないといけないと。高地で水がとれない田（丘田）では昔ながらの水苗代がいい。箱苗をするなら田植えの日を逆算して，その日には水が取れるようにしておかなければいけない。丘田ではそういうことができないから，箱苗は無理だと。

A は適した土はアカマサで、377-378 で消毒が必要であることを解説する。すなわち文末詞ソ[A201] は解説的な「補足説明のソ」である。

377	A	ホシテ　ツチノ　ショードクッテ　ユーヨナ　コトー	そして　土の　消毒と　いうような　ことを
378	A	アトデ　ヤッポー　スルソイナ[A201]——。	後で　やはり　するんだよね。

379	A	ハー。	（はあ）。
380	B	ウーン。　ソーデショーナー。	うん。　そうでしょうね。

さらに A は箱苗に撒くモミの量について説明する。435 で多く撒くとどうなるかを説明している。この文末詞ソも解説的な「補足説明のソ」である。

432	A	コノ　タワ　トーブン　ミズガ　トレンデヨット　オモーヨーナ	この　田は　当分　水が　とれないぞと　思うような
433	A	タエ　ウヨート。	田へ　植えようと。
434	B	ンー。	うん。
435	A	オモー　ナエワナー。　ニゴーマーチャー　アツイナー。　イチゴーハッシャクグライデエー。　テユー　コトワ　アツーマクトナ。　ナ　ハヨー　ウエラレント　ナエガ　ヤケルソイ[A202]。	思う　苗はね。　二合　まいては　厚いな。　一合八尺で　いい。　という　ことは　厚くまくとね。　（ナ）　早く　植えられないと　苗が　黄色くなってしまうんだよ。
436	B	ハ　ナルホド。	あ　なるほど。

さらに A は 443 で具体的に今年の例を持ち出し説明する。この文末詞ソ[A203]は具体例による「補足説明のソ」である。

440	A	コトシラノ　バーイワ　アンター	今年などの　場合は　（あなた）
441	A	ニジューゴンチドコロジャナー。　ミズガ　トレンカラサンジューゴンチモ　シジューンチグライ　ナッタヨナー。	二十五日どころでは　ない。水が　とれないから　三十五日も　四十日くらいにも　なったよね。
442	B	ホー。　ホリャー　ナガスギルガナ。	ほう。　それは　長すぎるよね。
443	A	ナェエギーワ　ナゴー　ナランソ[A203]。　ナゴー　ナルヨリャーネモトガ　ヤケルソ[A203]。	苗は　長く　ならないの。　長く　なるよりは　根元が　黄色くなるんだ。
444	B	ハー。　ナルホド。	はあ。　なるほど。

A は 462-463 でさらに熱心な人の処理の仕方を説明する。この文末詞ソは解説的な「補足説明のソ」である。

461	A	ヘテ	そして
462	A	タウエー　ミッカマェエニナ。	田植の　三日前にね。
463	A	ニョーソミズ　カケチョクソ[A204]。	尿素水を　かけておくんだ。
464	B	ハー　ハー　ハー　ハー。	はあ　はあ　はあ　はあ。
465	B	ナルホド。	なるほど。

さらにAは499、507-509-510、512-514、562で箱苗が一般的に難しいことを説明する。ここで使われている文末詞ソ[A205, A206, A207, A208]は全て解説的な「補足説明のソ」である。

499	A	ハコナェエワ　ソノ　テンガミズガ　ケーサンドーリニ　トレント　オーキナ　タイヘンナヤミガ　デテ　クルソ[A205]。	箱苗は　その　点が　水が　計算どおりに　とれないと　大きな　たいへん　悩みが　出てくるんだ。
500	B	ハー。　ソコニ　ヤッホ　イロイロナ　ケッテンガ　アルナー。	はあ。　そこに　やはり　いろいろな　欠点が　あるね。
（中略）			
507	A	ウエタオ　コサエテモジャナー。	植田を　作ってもだね。
508	B	ンー。	うん。
509	A	コーウンキデ　グルグルグルグル　マゼクルカラ。	耕運機で　ぐるぐるぐるぐるかき混ぜるから。
510	A	スグ　マゼクッテ　アクルヒーウエル　チュー　コター　デキンソ[A206]ジャー。	すぐ　かき混ぜて　翌日に　植える　という　ことは　できないんだ。
511	B	ホー。	ほう。
512	A	タウエキガ　ウマッテナー。	田植機が　埋まってね。
513	B	ハー。　アー　ソー　ソー。	はあ。　ああ　そう　そう。
514	A	ヤリニクイソ[A207]。	やりにくいんだ。
515	B	ハー。　ソリャー　ソージャロー。	はあ。　それは　そうだろう。
（中略）			

562	A	トコロガ キカェエデ ウエルワ サー ソレガ デキンソ[A208] イー。 アンマリ ヤオスギチャー イケンイ。	ところが 機械で 植えるときは（サー） それが できないんだよ。 あまり 柔らか過ぎては いけないんだよ。
563	B	ソー。	そう。

小談話 2

しかし，箱苗の特典は，畑苗と同じように根付くのが早いことだ[A209] と。苗代作りの苗の大きさにすぐに追いつく。さらに田植え機でやれば楽であると。（苗代では苗取りという作業も大変だという話が続く。）田植え機を使えば，女は楽になるけど，男は機械の使い方を習得したり操作したりしないといけないから楽にはならないとも。

小談話 2 では一転 A は箱苗の長所を語り始める。さらに進むと分かることだが、箱苗と田植え機を使うと楽で A はそういう農業を推奨する立場にある。そう考えると 592 は A が最も強調したいことであろう。したがって文末詞ホ[A209] は「注目引きのホ」と考えられる。

588	A	トコロガ ハ ハコナエノ トクテンワナ。	ところが （ハ） 箱苗の 特典はね。
589	B	ンー。	うん。
590	A	ケッキョク ソノー ナンデショー オー マー ハタケーナエト オナショーナ モンジャカラ。	結局 その 何でしょう（オー） まあ 畑苗と 同じような ものだから。
591	B	フン。	ふん。
592	A	カッチャクガ ハヤーホ[A209] エナー。	根付くのが 早いんだよね。
593	B	ハー。 ソージャロー。	はあ。 そうでしょう。

小談話 3

B は今年夫が苗取りした時大変だったから，来年からは箱苗にしてはと言った[B201] という話をする。

B が今年の苗取りの経験から、632 のように夫に忠言したというエピソードは先行する A の立場を補足的に支持するものである。すなわち文末詞ソ[B201] は支持

的な「補足説明のソ」である。

632	B	{笑} アー ワタシ ソネー ユータソ[B201]。 ウチノ トーサンニ ナー。 アー アンタ ウチニャー モー ライネンカラ ハコナエオ オシーナッテ。 モー ワタシモ ナェエオ トリキラント。 コトシ イッシューカン トッタラ コタェテナ。	{笑} ああ 私は そのように 言ったの。 家の 父さんに ね。「ああ あなた うちでは もう 来年から 箱苗をしなさいな」と。 もう 私も苗を 取ることができないから。 今年 一週間 取ったら こたえてね。
633	A	ソレー ソレー。	そう そう。

小談話 4

A は今年コンバインを買った「一の坂」の人は年寄りを当てにできなくなったから夫婦で一町八反の田をするには機械に頼らなければならない，だからコンバインを選んだんだ[A210]、年寄りを当てにしてはいけない」と言った[A211] と。今年の「佐賀」での会合の話を A が振り，そこで B が箱苗を作る研究をしないといけないと（若い衆に）言い，A がいろいろ教えてあげたと。（しばらく昔の田植えの話が続く。）A は自分が死んだらどうなるか[A212]，（若い衆は）タネの消毒の仕方も知らない，少しは覚えろ，いつ死ぬかわからないぞと言ってやったと。（タネの消毒の方法の話が続く。）箱苗づくりは，最初に塩水洗いをして，次に塩害を起こさないように，川の中にでもつけて塩をしっかりと落とさないといけない，そして消毒するんだ[A213] と。（その後田植えのこと，その後のことなど話が続く。）

小談話 4 では「一の坂」の話がきっかけとなり若者に対する A の思いが語られる。

655 での「一の坂」の人のことも 656-657 の出来事も A の「楽な農業」を支持する A の立場を支持するエピソードとして語られている。すなわち文末詞ソ[A210, A211] は具体例による支持的な「補足説明のソ」である。

655	A	ソレデ ソレオ ソレデ エランダソ[A210] イヤテ ワシガ ユータガノ。 テノ アル モナーマー エーケド	それで「それを それで 選んだんだよ」と 俺が 言ったんだ。 手伝い手の ある 者は まあ いいけど

656	A	テノ ナー モナー ソネ センニャー トシヨリオ アテシタッテナー。	手伝い手の ない 者は そのように しないと 年寄りを あてに したってね。
657	A	イケンテ ユーソ[A211]。	いけないって いうんだ。
658	B	ソレ ソレ。	そう そう。

698 での A の若者への問いかけは 700 で若者にもっと覚えるように、学ぶように諭すために参照的に問いかけられている。つまり文末詞ソ[A212]は参照的な「補足説明のソ」である。

697	B	ソエジャカラ モー コリャーモ ヨイヨー ジダェエノ。	それだから もう これは もう いよいよ 時代の。
698	A	ワタシャー ホャカラ オレガシンダラ オマエタチャー ドネー ナルソ[A212] カーテ。 カーイ	私は だから「俺が 死んだらおまえたちは どう なるのか」と。 まったく
699	A	タネノ ショードクノ ホーホーモ シッチャー オラン。ケーサンデ ワリダサンニャーマー イケンソヤガ ナニカー。	種の 消毒の 方法も 知っては いない。 計算で 割り出さないと（まあ） いけないんだが「何かい。
700	A	オマエタチャ エー ダェエショー オボエーヨー。 イツ シヌヤラ シランド。 オリャーッテ ワシャー ユーチャール。 {笑} ハー。	おまえたちは ええ 少しは 覚えろよ。 いつ 死ぬやら 知らんぞ。 俺は」と 俺は 言ってある。 {笑} はあ。

そして A は具体的な箱苗づくりについて語り始める。746 では具体的な手順が示されている。この文末詞ソ[A213]は解説的な「補足説明のソ」である。

745	A	ヘテ コンド アノ	そして 今度 あの
746	A	ショードク スルソ[A213] エナ。	消毒 するんだよね。
747	B	シー ホントーニ ナンジャネ。	うん ほんとうに なんだね。
748	A	ソレガ チョット メンドークサイケドナ。	それが ちょっと めんどうくさいけどね。
749	A	{笑}。	{笑}。

談話「農業の今昔」

最後の談話は「農業の今昔」で、昔の田植えは辛かったが、今では機械を使うとパッと植えられるという話である。便宜的に 4 つの小談話に分けられる。

小談話 2

B は学校を卒業して就いた農業は，牛で鋤いで鍬でならすというもので，取水する前に土の塊を起こしてそれをたたかなければならないという話題を持ちかける。唐鍬というものでたたくのは辛かったと続け，C もそれで手豆が指にでき，痛くて我慢できない[C301]と同調する。そこに A が片方からたたくと三本鍬がかち合う[A301]と割ってはいる。だからもう一人は反対を向いてたたくんだと語る。それに B，C も同調する。

B が昔の農業は大変だったというのに対して、C は 875-876-878-879-880-881-882-883-884-886 で具体的な例を示しながら同調する。つまり、文末詞ソ[C301]は具体例による「補足説明のソ」である。

875	C	コノー　ヒトツホーカラ　ソノーオー	この　一方から　（そのー）
876	C	ムイテ　タタキヨッタ　トコロガ。	むいて　たたいていた　ところが。
877	B	{笑}。	{笑}。
878	C	ソッチジャ　イケンテ　オークジョ　クライヨル。	そっちでは　だめだと　大目玉を　食らっている。
879	C	ホデ　ソノー　ヒトリワ　ウシロムキー　ナッチョッタ。	それで　その　ひとりは　後ろ向きに　なっていた。
880	C	ホテ　ポッタンポッタン　タタイタラ　モー	そして　ポッタンポッタン　たたくと　もう
881	C	サンジップンモ　ヤッタラモー　コレ。	三十分も　やると　もう　これ。
882	C	テマメッテ　ユー　ヤツガ　ココノ　アノー　ユビー。	手豆と　いう　ものが　ここの　あの　指に。
883	C	ココエ　デキテ。	ここに　できて。
884	C	ソノー　コレガ　モ　マッカッケー　ナッテナー。	その　これが　もう　まっ赤になってな。

885	A	ヒトツ。	ひとつ。
886	C	モ イトーデ ヤレンソ[C301] ジャー。	もう 痛くて 我慢できないんだ。
887	A	ヒトツ イマー キーチョリャーノー。	ひとつ 今 聞いていればね。
888	A	ヒトツホーカラ タタクトジャナー。	一方から たたくとだね。
889	C	ウン。	うん。
890	B	ウン。	うん。
891	A	サンボンコーガ ガチアウホー[A301] ジャー。	三本鍬が かちあうんだよ。
892	C	オー ソレー。	おう そうだ。
893	B	フーン。	ふうん。

A は C の 875-876-878-879-880 での唐鍬の使い方の説明に不満を持ったのであろう。A は 887-888-891 で的確に描写をしようとする。それに対して 892、893 で C、B 共に同調する。このことから、この文末詞ホ[A301] は「注目引きのホ」であると考えられる。

小談話 2

B は辛くて，農業は嫌だと思ったと。C も同調し，学校から道草して帰ると叱られた話をする。A も自分の体験を話し，学校から家に帰ると来るようにという書き置きがあった[A302] という話をする。

A の 938-940-941 での体験談が 942-945、943-947 で B、C の笑いを誘うこと、944 で繰り返されていることから、文末詞ホは「注目引きのホ」である。

938	A	オリャーノー。	俺の家はな。
939	C	オー。	おう。
940	A	カエッテ ミルトノー。	帰って みるとね。
941	A	チャント カキオキガ シチャルホ[A302] ジャー。	ちゃんと 書き置きが してあるんだ。
942	B	{笑}。	{笑}。

943	C	{笑}。	{笑}。
944	A	ガッコーカラ　カイッタラ　ドコソコイ　コイテ　カキオキガシチャル。　アー。	学校から　帰ったら　どこそこに　来いと　書き置きが　してある。　ああ。
945	B	アー　{笑}。	ああ　{笑}。
946	C	アー　ジャロー。	ああ　だろう。
947	C	{笑}。	{笑}。

小談話 3

さらに A は馬に引かせる馬鍬を押さえるのが辛かった[A303]，それで父親が押さえるのに都合がいい道具を作ってくれたんだ[A304] という話をする。B が馬鍬がどういうものであったかを話し，さらに A が馬に引かせて，必死で押さえるのだ[A305] と説明する。そうすると土が柔らかく細かくなると B が続け，3 人は馬鍬にまつわる話を続ける。そして，田に水を溜めるまでにどれぐらい鋤かなければならないかという話が続く。

小談話 3 でも A は引き続き辛かった体験談を披露する。

955-958-960 で A は馬鍬の体験談を語るのであるが、956、957 での C、B のそれを待つ態度から、文末詞ホ[A303] は「注目引きのホ」である。962-963-964-966-969 で父親が作ってくれた道具を語る時にも 967、968 での B、C が示す興味から、文末詞ホ[A304] も「注目引きのホ」である。

955	A	アレ　ワスレンガ　ナンジャノー。	あれ　忘れないが　何だなあ。
956	C	ンー　ンー　ンー。	うん　うん　うん。
957	B	フーン　フーン。	ふん　ふん。
958	A	アノー　マグワエナ。　ミズトル　マグワ。　アノ　マグワガ　ツイ　アノ　コータホジャー　オレガ　チビジャカラ。	あの　馬鍬よな。　水を　取る　馬鍬。　あの　馬鍬が　ただ　あの　買ったものでは　俺が　チビだから。
959	C	ウン。	うん。
960	A	エラーホ[A303] ジャー　タコーニコー　オサエニャ　イケンカラ。	つらいんだ　高く　（こう）　押さえなければ　ならないから。
961	B	ウーン。	うん。

962	A	ホェデ　オヤジガナー。	それで　親父がな。
963	A	ダェエクモ　ヤリャー　コビキモ　ヤリヨッタカラ。	大工も　やれば　木挽きもやっていたから。
964	A	オレガ　コハェチャル　オマエチョード　エーソ　コハェチャルテ。	俺が　作ってやる　おまえにちょうど　いいのを　作ってやると。
965	B	フーン。	ふん。
966	A	ウエカラ　シタニー　オサエルヨーナ。	上から　下に　押さえるような。
967	B	ハー　ハー　ハー。　ソレカナ。	はあ　はあ　はあ。　そうなの。
968	C	ハー　ハー　ソレカエ。	はあ　はあ　そうか。
969	A	アノー　トリテオ　ヒクー　スリャーナー。　ラクナ。　アネーヤッテ　コサエテ　クレヨッ<u>クレタホ</u>[A304]。	あの　取り手を　低く　すればね。　楽だ。　そう　やって　作って（クレヨッ）<u>くれたんだ</u>。
970	C	ンー。	うん。

引き続き A は B と共に 980-981-982 でどうやってその道具を使って牛に引かせるか語りあう。982 で A は「オサエル」を繰り返すが、B と共話の形で語っているので、「注目引き」を狙っているわけではない。文末詞ソ[A305] は単なる一般的な「補足説明のソ」である。

980	B	ウシー　ヒッパラシテ　ズーット。	牛に　引っ張らせて　ずっと。
981	B	ソシタラー。	そうすると。
982	A	ウシー　ヒッパラシテナー　<u>オサエルソ</u>[A305]。　イッショケンメー　ヒッシニ　ナッテ　オサエル。	牛に　引っ張らせてね　<u>押さえるんだ</u>。　一生懸命に　必死になって　押さえる。
983	B	ハー	はあ
984	B	ソシタラ　ツチガ　ヤワラカニコモー　ナル　ワケイナー。	すると　土が　柔らかく　細かく　なる　わけよね。

小談話 4

C が持ちかけた代鍬について B が続け、山の中の田は水持ちが悪いから代鋤というのをしなければならないと皆が言うのだ[B301]と言う。A は水持ちの悪い田は中作りというのをする[A306]と続ける。つまり，さらに何度か鋤くんだ[A307]という。B は通算何回（鋤きに）入るのか[B302]と問い，それに C が 5、6 回だと答える。しかし、C は耕運機を使うと一回でやってしまう土地もあると言う。B はそれで田植えをするのか[B303]と問い，C がそうだと答える。A は耕運機を使う時には鉄車輪をつけて，水を溜めて一気に鋤くのだ[A308]と付け加える。それで一気に田植えをするのだ[A309]と。（さらに田植えについての話が続く。）

C が持ちかけた「代鍬」が B の記憶を呼び起こしたのだろう。B は 1117 で文末詞「ッチャ」を使用している。その語源が「てば」であり、発話内容を相手に受け入れさせる働きがある[4]ことから一種の「注目引き」の効果があると考えられる。それに続く 1120 でも別の形式で同じ効果を狙っているのだろう。すなわち、文末詞ホ[B301]は「注目引きのホ」であろう。

1117	B	シロズキ　チューソー　ワタシワ　オボエチョルッチャ。	代鋤　というのを　私は　覚えているよ。
1118	C	シロズキ　ッチューソー	代鋤　というのを
1119	C	ツクンデショ。	作るんでしょ。
1120	B	ミンナガ　シロズキオ　センニャー　イケンテ　ユーテノホー[B301]。	みんなが　代鋤を　しなければいけないと　言われるんだよ。
1121	C	ハー。	はあ。
1122	A	ンー。	うん。

C は代鋤は 4、5 回すると言い、A はその解説を行う。すなわち、1142-1144 で水持ちの悪い田には中作りというものをするということ、1146-1147-1150-1151 でさらに何回か鍬をすると説明する。したがって、文末詞ソ[A306, A307]はいずれも解説的な「補足説明のソ」である。

1142	A	イヤ　イヤ。　アノナー。　ミズモチノ　ワルイ　タワナー。　アノー　ネンオ　エレテ　ヤルトコロワナー。	いや　いや。　あのな。　水持ちの　悪い　田はね。　あの　念を　入れて　やる　所はね。

1143	B	アラ　マ。	あら　まあ。
1144	A	ナカズクリ　チュー　コトー　ヤルソ[A306]イ。　モー　イッペン。　ウン。	中作り　という　ことを　やるんだよ。　もう　一度。　うん。
1145	C	ウン。	うん。
1146	A	ホヤカラ　イッペン　シロズキオ　ヤッテヤナー。	だから　一度　代鋤を　やってだね。
1147	A	マタ　カクイナ　イチオー。	また　掻くよね　一応。
1148	C	ウーン。	うん。
1149	B	ホー。	ほう。
1150	A	カク　カーテ。	（カク）　掻いて。
1151	A	マタ　サラニ　ソノ　ウエオ　マタ　モー　イッペン　スクソ[A307]ジャー。	また　さらに　その　上を　また　もう　一度　鋤くんだ。
1152	C	ウン。	うん。
1153	B	ホンナラ　ハナカラ　シマェエ　マデニ　ナンベン　ハイルホ[B302]カナー。	そんなら　最初から　最後までに　何度　入るのかねえ。
1154	C	ソラ　マー　ゴヘングラェエ　ハイルナ。	それは　まあ　五回くらいは　入るね。

解説を聞いた B は興味を持ち 1153 で回数を問う。すなわち、文末詞[B302]は興味・関心を表す「情意表明のホ」である。

耕運機を使った場合の話になり、C は 1181-1182-1184 で一回でやってしまう地域の話を持ち出す。それに対して B が 1185 でその意味を問い確認する。つまり、文末詞ソ[B303]は解説的な「補足説明のソ」である。1153 でも疑問の形式「カナー」が用いられているが、そこでは B は鋤く回数に関心を持っている。それに対して、1185 では「一回でやる」とは「それで終わりで、もう植えるのか」というメタ的な意味を問うているところが異なる。

1181	C	コノー　オキダヘンワー	この　沖田あたりは
1182	C	イッカイデ　ヤッテ　シマウンジャカラ。	一回で　やって　しまうんだから。
1183	B	ンマー。	まあ。

1184	C	イッカイニ タテヨコ カーテヤッテ シマウ。	一回に 縦横を 掻いて やって しまう。
1185	B	ソレデ ウエルソ[B303] カナ。	それで 植えるのかな。
1186	C	アー。	ああ。
1187	B	へー。	へえ。

さらに 1199-1204-1206 で A は耕運機でする方法の解説を続ける。すなわち 1206 の文末詞ソ[A308] は解説的な「補足説明のホ」である。

1199	A	イマ コーウンキデ ヤルバーイワ。	今 耕運機で やる 場合は。
1200	C	ウーン。	うん。
1201	B	ウン。	うん。
1202	C	ンー。	うん。
1203	B	ンー。	うん。
1204	A	スイデンシャリン テッシャリント ユー モノー ツケテヤナー。 ミズー タメテ。	水田車輪 鉄車輪と いう ものを つけてだね。 水を ためて。
1205	B	ホー。	ほう。
1206	A	イッペンニ スルソ[A308] ジャ。	一気に するんだ。
1207	C	{笑}。	{笑}。
1208	B	マー アラタエナー。	まあ 荒っぽいね。
1209	A	ハー。	はあ。
1210	B	アラ。	あら。
1211	A	ソレナラ パーット ハー ウエルソ[A309]。	それなら ぱあっと もう 植えるんだ。
1212	B	ソレカナ。	そうなの。
1213	A	ソレデ ソレデナー。 イッペンニ ゴマカサレル。	それで それでね。 一回で ごまかされる。

1211 は 1206 のメタ的な説明である。したがって文末詞ソ[A309] も解説的な「補足説明のホ」である。

まとめ

以上、談話の構成や参加者の相互作用を注意深く観察しながら、文末詞ホ・ソ

の機能を考察した。

豊浦郡豊北町の方言では文末詞としてホ・ソいずれの使用も認められ、その使用は恣意的なものではなく、法則的なものであることが示された。それぞれの文末詞の用法を次の表に示す。

ホ	注目引き	
	情意表明	感心・感動、驚き発見、興味・関心
ソ	場面説明	
	補足説明	限定的、参照的、解説的、具体的、支持的

この談話の分析を通して、この地域ではこのような文末詞の使い分けを駆使してダイナミックに談話を構成しながら、他の参加者に対して効果的に説明をしていることが分かる。

今回は文末詞に後続する終助詞との組み合わせについては考察していないが、おそらくさらにダイナミックな談話の構成が見られるのではないかと思うが、それについては今後の課題としたい。また、文末詞ソが無標であり、文末詞ホが有標の形式だと考えられるが、それについての詳しい議論も今後の課題としたい。

注

1）https://crd.ndl.go.jp/reference/detAil?pAge=ref_view&id=1000240268

2）この白地図の出典は次の通り。https://www.freemAp.jp

3）例えば、「オリャー　アンマリ　オカシー　トコワ　ミルソワ　イヤデヤテ　ユータ（俺は　「あまり　おかしな　ところは　見るのは　いやだよ」と　言った）」「ヘグソワ　メンドークサーカラナ（はぐのは　めんどうくさいからね。）」のように形式名詞ソの例が多く見られる。

4）藤原（1986）、舩木（2000）による。

参考文献

国立国語研究所（2003）『全国方言談話データベース「日本のふるさとことば集成」第 15 巻　広島・山口』国書刊行会
中田一志（2012）「「のだ」の結果用法と過程用法」『日本語・日本文化』38
野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版
平山輝男，有元光彦編（2017）『山口県のことば　日本のことばシリーズ 35』明治書院
藤原与一（1986）『方言文末詞＜文末助詞＞の研究　下』春陽堂書店
舩木礼子（2000）「山口方言の文末詞チャ」『阪大社会言語学研究ノート』2

付記：本研究は科研費 22K00598 および 19H01262 の助成を受けたものです。

キーワード：文末詞ホ・ソ、長門方言、注目引き、情意表明、場面説明、補足説明

A Study of the Sentence-Final Particles ‘Ho’ And ‘So’ in Nagato Dialect

NAKATA Hitoshi

The previous literature characterizes, as analogous to ‘no(da)’ in the standard Japanese, the form ‘ho’ at the end of sentences in the Nagato dialect. However, alongside ‘ho,’ the form ‘so’ shows up in the dialectal discourse database. This paper illustrates that the use of these sentence-final particles is not arbitrary or subjective but follows a systematic pattern. The sentence-ending ‘ho’ primarily serves for explanations with ‘attention-grabbing’ and ‘emotional expression.’ Conversely, ‘so’ is utilized for ‘situational descriptions’ and ‘supplementary explanations.’